

## ローマ共和政期のオスティア

毛利 晶

### 1. カストルム

カストルムの城壁は、東門の北側の部分を現地で調査した。ここでは、もともとの壁がローマ帝政期の家に組み込まれて今日まで残っている<sup>(1)</sup>。それはフィデーナエ近郊のカステル・ジュビレオの採石場でとれた凝灰岩の方石積み（*opera quadrata*）で、この採石場をローマ人が手に入れるのは、前 4 世紀初頭のウェイイ征服のあとのことだと一般に考えられている。G. Calza によると、この凝灰岩が使われている建物は、オスティアのカストルムの城壁を除けば、パラティヌス丘の第二壁（前 379 年）<sup>(2)</sup>とコンコルディア神殿第一神殿（前 366 年）<sup>(3)</sup>のポデウムにすぎない。この凝灰岩は質が劣っているため、ローマ人はこれら三つのモニュメント以外にこの石を使うことはなかったという<sup>(4)</sup>。こうした観察に加えて、カストルム東門の北側の地形学的なデータおよびここで出土した陶器から得られたデータを勘案した上で、Calza はオスティアのカストルムの建設を前四世紀の終わりか前 3 世紀の初頭に置いた<sup>(5)</sup>。しかしながら、まさにカストルムの城壁の素材を根拠に、F. Coarelli はもっと古い年代を提案する<sup>(6)</sup>。つまり Coarelli によると、ローマ人はグロッタ・オスクーラの採石場が利用できるようになってからは、フィデーナエの凝灰岩を全く使わなくなった。彼らがウェイイ領のグロッタ・オスクーラの採石場を利用出来るようになったのはこのエトルリア人都市の征服のあとで、この採石場でとられた石は、所謂セルウィウスの市壁の「再建」（Coarelli によると前三七七年以降）のために用いられている。Coarelli は加えて、自らが征服した都市の領域から取られた石を使うというイデオロギー的な動機もあったと想像し、カストルムの城壁はローマ人がフィデーナエを奪取して破壊した（前 435 年か前 426 年）あとの時期にまで遡る可能性があると結論づける。城壁で使われている石に基づくカストルムの年代の決定は、このように 100 年の幅があるうえ、フィデーナエの凝灰岩がグロッタ・オスクーラの凝灰岩にとって代わられたというのは仮説にすぎず、実際には証明されていない<sup>(7)</sup>。従ってフィデーナエの凝灰岩の利用はカストルムの年代決定の根拠としがたいだろう。

カストルム建設の時期に関して R. Meiggs は、歴史的背景を考慮し、また帝政期のフォルム（かつてのカストルムの中心）で出土した陶器の破片を基に、これを前 4 世紀の初頭か中葉に置く<sup>(8)</sup>。中部イタリアの西海岸は既に前 4 世紀の初頭からギリシア人によってしばしば掠奪

されていたらしい。ディオドーロスによるとエトルリア人都市カエレの外港ピュルギは、前 384/3 年にシュラクーサエの僭主ディオニューシオス一世の艦隊によって掠奪された（第5 巻 13~4）。さらにリーウィウスは前349年の出来事として、「海およびアンティウムの海岸線、それにラーウィーニウムの一帯とティベリス川河口はギリシア人の船団によって脅かされた」、と記している（第 7 巻第 25 章 4）。プラエトルだったルーキウス・ピナーリウスが海岸防衛のために派遣されたが、リーウィウスによると語るに値する戦闘は行われず、ギリシア人は水とその他の必需品の欠乏から立ち去った。Meiggs はこの情報をカストルム建設と直接結びつけて考える。勿論、リーウィウスが物語る歴史的状況が海岸地域の防衛システムを改良する必要性をローマ人に思い起こさせた可能性はあるが、前 349 年の出来事のような具体的な危険に対処するために彼らがカストルムを建設したかは疑わしい。約 2.5 ヘクタールもあるカストルムは、こうした目的のためには大きすぎるように思えるからである。帝政期のフォルムで出土した陶器（輸入品の壺で、前 400 年から 340 年の間に作られた<sup>(9)</sup>）の断片に関して言えば、A. Martin が強調するように<sup>(10)</sup>、カストルムが建設される以前からこの地を人びとが訪れていた、あるいは定住していた可能性を排除できないので、これらの破片はカストルムの建設時期を決める上で決定的ではないだろう。Martin は更に、これまで行われてきた研究はカストルムの城壁が一挙に作られたことを前提とするが、この前提は証明されていないことに注意を促す。Martin 自身は、Reg. I, ins. x. 3 のタベルナ地域で行った自身の発掘調査を基に（すなわち、城壁建設時期の地層から出土した陶器の破片を基に）、少なくともこの場所では、カストルムは前 4 世紀までは、或いは前 4 世紀末以上には遡りえないと断定している<sup>(11)</sup>。

Martin は、カストルムが前 3 世紀に建設された可能性を排除しなかったが、F. Zevi は、Martin が行った発掘調査を高く評価するものの、カストルムの建設がこれほど遅い可能性は認めず、前 4 世紀末を主張している。Zevi の議論で最も興味深い点は、カストルムとオスティア街道の間に有機的で不可分の関係を指摘したことだろう。Zevi によると、こうした関係がある以上、街道の敷設とカストルムの建設は同時期と考えざるをえない。そしてこの街道はどう見ても「軍道」の外観をしており、工法に関して言えば、前 312 年に敷設されたアッピア街道に、そして恐らくラテン街道とも非常によく似ているので、こうした観察から導きだされる結論として、カストルムもまたこの時期、つまり前 4 世紀の終わり頃に建設されたということになる<sup>(12)</sup>。オスティア街道は、オスティアの領域で幾つかの区間が A. Pellegrino によって発掘されたが、アチリアの丘陵で実施された陸橋部分の発掘が特に重要と言えよう<sup>(13)</sup>。Pellegrino はこの陸橋の建

設を前 3 世紀末に遡らせている。Zevi は最初グラックス兄弟の時期を考えていたが、後に考えを変え、発掘者が提唱した年代決定に同意した<sup>(14)</sup>。M. Raddi は 2010 年 11 月 18 日に神戸大学で行った講演と、同 21 日に京都で行われたシンポジウムの報告のなかでこの発掘調査に言及し、陸橋の建設を、ポエニ戦争時にローマとオスティアの港を安全かつ最短の路線で結ぶ必要が生じたことと結びつけた。この発掘調査は、オスティア街道が開かれたあとも、軍事的な必要や食料供給の必要に従って改修・改善がなされたことを明らかに示していると言えるだろう。

共和政期ローマの植民活動に関する包括的な研究を行った E. T. Salmon は、オスティアとアンティウムへの入植を海岸地域防衛のために行われたローマ市民の入植（*coloniae maritimae*）の最初の例として、これらを「ラテン人戦争（前 341~338 年）」終了後の時期、ローマが、打ち負かした諸国家との関係を規定した時に置いている<sup>(15)</sup>。ローマは前 329 年にタッラキーナで、さらに 296 年にはミントウルナエとシヌエッサで同様の入植活動を行った。そしてタッラキーナへの入植から 17 年後に、ローマとを結ぶ軍事街道（アッピア街道）が開かれる（前 312 年）。オスティアでもカストルムが建設された後に軍事街道（オスティア街道）の敷設が実現した可能性があるだろう。

カストルムの建設を前 4 世紀の終わり頃に置く説に対する批判として、リウィウスが『ローマ建国以来の歴史』の第 2 ペンターデ（第 6~10 巻）でオスティアへの入植について黙して語らないことを指摘する人が多い。他の論拠（少なくとも前 2 世紀の終わりまでオスティアはローマの母市係プラエトルに直接統治されていた；共和政期のカストルムにはフォルム（公共広場）がない；カストルムの住民を埋葬した共和政中期の墓が見つかっていない）に加えて、この事実から I. Pohl は、いわゆる「スラの城壁」が建設されるまでオスティアはコロニア（a colony）ではなく、単に軍事的な要塞（a fort）にすぎなかったと結論づけた<sup>(16)</sup>。しかし‘fort’と‘colony’を対立的に捉えるのは適切ではないという Zevi の指摘<sup>(17)</sup>は、正しいように思える。カストルムは、疑いもなく軍事的な性格を持つ *colonia maritima* と考えられていた<sup>(18)</sup>。リウィウスがその建設について語らないのは、R. Rebuffat によると、ローマの年代記の伝承のなかでアンクス・マルキウス王による建設が完全に定着していたので、もはや新しい建設を記す余地がなかったからだという<sup>(19)</sup>。恐らく私たちは、この点に関して、前 4 世紀のファスティには欠損があり、一部混乱している事実も忘れてはならないだろう。その際に問題となるのは単に政務官の名前の欠損や混乱だけでなく、政務官の名前と結びつけて伝えられた歴史情報も影響を受けた

可能性がある。しかしながら、たとえカストルムの建設が共和政期の年代記には伝わっていたとしても、リウィウスにはこれを飛ばさざるをえない理由があった。つまり、彼はアンティウムへの入植を、ローマがラテン人戦争の終了後に敗者に対して採った措置について述べる中に置いたので、ローマ領に建設されたカストルムには言及できなかった。そしてアンティウムへの入植について語ってしまった以上は、同時に建設されたカストルムに帰ることができなかつたのである<sup>(20)</sup>。

カストルムが築かれた場所と道との関係を見抜いたのは G. Becatti だった<sup>(21)</sup>。Becatti によると、ローマを塩田および海と結ぶ径（未来のオスティア街道）が以前から存在し、カストルムの方位はこの径によって決定された。つまり、この径の最後の部分がカストルムの東西の大路（*decumanus maximus*）として利用されたのである。ところでスッラ以降のオスティアを南北に走る大路（*cardo maximus*）は、実際にはかつてのかつてのカストルムの南門を出たあたりで南東方向に向きを変えている。しかしこの南東から北西に走る *cardo maximus* の南の部分、カストルムの南門の前で北に向きを変えずに地図の上でそのまま伸ばすと、かつてのカストルムの西門の前からティベリス川の河口へ至る「河口への道（*Via della Foce*）」に繋がる。Becatti はこの事実に注意を促し、もともと *cardo maximus* の南の部分と河口への道は一本の道（*Via Laurentina*）で、南のラーウィーニウムの領域からティベリス川の河口に向かって走っていたが、カストルムの建設により分断されたと推測する。「オスティア街道」の原型をイタリア中部山岳地帯のサビニ人の土地に始まる「塩の道（*Via Salaria*）」の延長と捉える R. Mar は、この道の始まりをカストルムの建設以前に置く点で Becatti に同意するが、*Via Laurentina* については、それがカストルム建設以前から存在したかは分からないとしている<sup>(22)</sup>。

このように Becatto と Mar は、共にローマを塩田と結ぶ古い径が存在したと考えているが、私もこの仮説に異存はない（因みにこの塩田は、後にカストルムが建設されることになる場所の東に存在したのだろう）。恐らくこの径は海岸まで延長され、後にカストルムの *decumanus maximus* となった。しかしこの径は計画的に開かれたものではなく、その道筋は、Zevi が指摘するように要点を最短距離で結ぶ軍道として敷設されたオスティア街道の道筋と完全には一致しなかつたと考えられる。ところでもし古い塩の径がカストルムの *decumanus maximus* になつたとすれば、オスティア街道の敷設をカストルムの建設よりあととする仮説は一層蓋然性が増

すだろう。他方ラウレントゥム街道とカストルム建設の年代的な関係については、Marの主張は説得的ではないように思われる。むしろ、河口への道とラウレントゥム街道に関するBecattiの仮説を受け入れて、ラーウィーニウムの領域からティベリス川の河口に至る道はカストルムの建設より前から存在していたと想像したい。

もしカストルムが古いラウレントゥム街道の一部を切り取って建設されたとすれば、その建設はラーウィーニウムにとって重要な意味を持った可能性がある<sup>(23)</sup>。リーウィウスはラテン人戦争時のラーウィーニウムに関して、「[ローマに反乱した]ラテン人に対してラーウィーニウムも援軍を送ろうとしたが、あれこれ考えるうちに徒に時を費やし、ようやく援軍の派遣に踏み切ったのは、彼らが敗北したあとだった。そしてすでに第一の軍旗と部隊の一部が市門から出たとき、ラテン人の敗北に関する報告がもたらされたので、軍旗を返した都市の中に引き返した」(第8巻第11章3以下。cf. *CIL* X, 797)と記し、戦争が終わった後に「ラウレンテース(ラーウィーニウム市民)とのあいだの条約の更新が命じられた。これ以降[条約は]毎年ラテン人祭(*feriae Latinae*)の10日後に更新されている」(第8巻第11章15)と付け加えている。この年代記に伝わる伝承から、ローマとラーウィーニウムの間に実際に存在した政治的関係を推しはかることは難しい。他方マクロビウス(*Sat.* III, 4, 11f.)によると、ローマのコーンスルとプラエトルは就任すると直ぐに、ペナーテース神とウェスタ女神に供犠を行うためラーウィーニウムに赴いた。この慣習からF. Coarelliは、ローマ人がラテン人に対して勝利を収めたあと、自分たちの覇権のもと、神聖な絆によってラテン人の統一を再構築しようとしたことを読み取っている<sup>(24)</sup>。実際、ラーウィーニウムの「13基の祭壇の神域」で最後の大規模な改修が行われたのは前4世紀の終わり<sup>(25)</sup>、つまりオスティアでカストルムが築かれたのとほぼ同じ頃のことである。この事実は、単なる偶然の一致とは考えがたい。ラテン人戦争の後、ローマはラティウムとカンパーニア北部に築いた支配体制の中に、事実上ラーウィーニウムもまた組み込んだ。この点で、カストルムの建設のために古いラウレントゥム街道が切り取られたことは、支配と保護という二重の観点から考察することができる。カストルムは、海賊や盗賊がティベリス川の河口に上陸し、ラーウィーニウムの領土に侵入するのを防ぐことができた。しかしこのことは同時に、ラーウィーニウム市民がティベリス川の河口との直接の結びつきをたたれることをも意味したのである。しかしながらカストルムの(海側から見て)背後を走る小道(*Semita dei Cippi*)<sup>(26)</sup>は、新しいラウレントゥム街道とオスティア街道、さらにはティベリス川左岸の船着場と結びつけた。いずれにせよ、当時のローマとラーウィーニウムの関係を理解するためには、カストルム

の建設と同時にラウレントゥム街道も考慮に入れる必要があるだろう。

ローマとラーウィーニウムの関係に関して、もう一つ興味深い問題がある。上で、もしカストルムがアンティウムへの入植と時を同じくしてローマ領に建設されたとすれば、リーウィウスがカストルムの建設に言及しなかったのは説明がつくと述べた。しかしもしラテン人戦争当時ラーウィーニウムの領域がティベリス川の河口まで広がっていたとすれば<sup>(27)</sup>、ローマはこの戦争で奪った土地にカストルムを建設した可能性があるだろう。しかしこの可能性は低いと考える。ウェイイを破壊したあと、ローマはティベリス川の河口地帯で支配権を行使していたらしい。勿論カエレとの間で紛争があったように、ラーウィーニウムとの間にも時に紛争が生じることがあったかもしれない。しかし共和政期の歴史記述では、ローマとラーウィーニウムとの間の紛争は、たとえそれがあつたとしても、何らかの理由で語られなかったらしい。いずれにせよリーウィウスは、アンクス・マルキウス王による征服以来この地域がローマ領であることを確信していたにちがいない。恐らくローマがカストルムを建設したのは何かある具体的な脅威に対処するためではなく、ラテン人戦争後にラティウムとカンパーニア北部で築きつあつた防衛体制の一部として行ったのだろう。前 349 年の経験がローマ人に、ティベリス川の河口からアンティウムまでのラティウムの海岸でより効率的な防衛体制を構築する必要性を気づかせた可能性はある。しかしこうした場合でも、ローマが直ちに事業に着手したと考える必要はないだろう。むしろアンティウムの海軍力を破壊したあと初めて、恐らくローマは自らの力とイニシアチブで防衛体制を構築し始めたのだろう。

## 2. オスティア領：最近の発掘調査

2010 年に神戸大学で行った講演と京都シンポジウムの報告で Pellegrino は、かつてローマとオスティアの間の土地は砂漠のように何もなかったが、ここ数十年にオスティアの領域で行われた発掘調査により多くの重要で興味深い遺跡が見つかった、と述べた。調査はテーヴェレ川とヴィア・オスチエンセの間の高台（ドラゴンチェッロ、モンティ・ディ・サン・パオロ、モンテ・クーニョ）およびマラフェーデ地区で実施され、共和政中期のヴィッラとネクロポリ（墳墓群）を発掘した<sup>(28)</sup>。ドラゴンチェッロでは Pellegrino によって幾つかの農場（前 4 世紀末か同 3 世紀のものと考えられ、幾つかは近くに小さなネクロポリがあつた）が発掘された<sup>(29)</sup>。発掘担当者の研究によると、共和政中期のヴィッラは前 2 世紀の末か同 1 世紀の初めまで使われ、その後放棄されたが、早くもスッラからカエサルの時代には、幾つかの再建が始まり、残りも帝

政期には改築された<sup>(30)</sup>。この研究成果は、神戸大学と京都シンポジウムで Raddi によっても報告された。これらを歴史研究で活用することは非常に興味深い、容易でない企てである。ドラゴンチェッロで発掘された共和政中期の農場については、研究の現状に関する Pavolino の発言を引用するに止めておきたい。つまり Pavolino は、これまで得られたデータからは、ドラゴンチェッロの農民たちと共和政中期のオスティア建設の間に何らかの制度上の関係があったと推測することは困難だ、と述べている<sup>(31)</sup>。

歴史家にとっては、共和政中期の農場が前 2 世紀の末か同 1 世紀の初めに放棄された理由、およびスッラからカエサルにかけての時代にそれらが部分的に再建された理由が特に興味深い。放棄されたのが第二回ポエニ戦争の終了後ほぼ 1 世紀経っているという事実をとってみても、この戦争の直接の影響を考えることは出来ないだろう。因みに、かつては第二回ポエニ戦争がイタリアの農業に与えた破壊的影響が強調されたが<sup>(32)</sup>、恐らく実際には、この影響はむしろ間接的でまた限定的だった<sup>(33)</sup>。いずれにせよ、ドラゴンチェッロにおける発掘調査は、小規模な農業経営がローマ近郊で第二回ポエニ戦争の後も長く存続したことを示している。もし放棄されたのが前 2 世紀の末であれば、特別の原因を挙げるのは難しい。しかしもし前 1 世紀の初頭に放棄されたのなら、スラ派とマリウス派の内乱が原因だった可能性も排除出来ないだろう。

### 3. オスティアの伝統宗教とローマ

私がオスティアで行った調査対象の一つに、共和政期の伝統宗教があった。研究を始めた動機は、「オスティアのようなローマのコローニアに住む人びとにとって、伝統的な宗教はどのような意味を持っていたのか」という問である。この目的で、P. Germoni と P. Olivanti の協力を得てオスティアの神域で出土した奉納品の幾つかを調べたが、満足のいく結果は得られなかった。出土した奉納品の歴史的なコンテキストが必ずしも明かではなく、また病の治癒を祈願あるいは感謝して奉納された体の一部を形取った像（*ex voto anatomici*）のように、奉納した人の具体的な願いを読み取れる奉納品も少なかったからである。袋を肩に担ぐテラコッタの小像（港か塩田で働く労働者が奉納？）が僅かな例外だった。そこで対象を少し広げて、オスティアとほぼ同時期にローマ市民の入植が行われたアンティウム（アンツィオ）とタッラキーナ（テッラチーナ）の考古学博物館も訪れてみた。テッラチーナでは収穫はなかったが、アンツィオではテラコッタ製の小像が興味を引いた。ラティウムの神域に典型的なタイプの奉納品で、ヴィアーレ・デッレ・ロッセレの、恐らくローマ人のコローニアの一部だった場所で、他の奉納品とともに出土

したという。ただここでもこれ以外に、私の研究に役立つような資料を入手することはできなかった。

オスティアには多くの重要な神域があるが、私はこのうち所謂「共和政期の聖域（ la area sacra repubblicana ）」と「四小神殿の神域（ il santuario dei quattro tempietti ）」の小神殿を重点的に調査した。

「共和政期の聖域」は何度も改増築が加えられて古代末期まで使われ続けたが、ヘルクレス神の神殿、四柱式神殿（恐らく医神アエスクラーピウスを祀る）、円形祭壇の神殿（祀られていた神は不明、祭壇は失われた）は、原形が共和政期に遡る<sup>(34)</sup>。ヘルクレス神殿とその付近では、いくつかの重要な遺物が出土している。一つは神殿の前房（プロナオス）で見つかった祭壇。銘文がプラエフェクトゥス・アンノーナエ（食料供給を司る長官）のホスティリウス・アンティパテルにより「不敗の神ヘルクレス」へ奉納された旨語るところから<sup>(35)</sup>、この神殿の祭神はヘルクレス神であることが分かった。二つ目はレリーフが施された大理石の板で、神殿の前で見つかった。銘文によるとト腸師ガーイウス・フルウィウス・サルウィスが奉納し、一般に、ヘルクレス神の予言を描くと解釈されている<sup>(36)</sup>。レリーフの左側には月桂冠を持った小さな勝利の女神（ウィクトリア）が左に向かって飛んでおり、誰かに月桂冠を渡そうとしているらしいが、レリーフは左の端が破損しており、恐らくそこに描かれていた人物は欠損している。中央の場面でヘルクレス神が予言するのは、この人物が上げることになる勝利だろう。Becattiによると、このサルウィスのレリーフは前 80 年と 65 年の間にオスティアの工房で製作された。神殿の近くからは、もう一つ、頭部の欠損した男性像が出土している。銘文によると、ガーイウス・カルティリウス・ポプリコラが 2 回目と 3 回目の二人役の間（前 40~30 年）に奉納したもので、英雄化された奉納者の像と考えられている<sup>(37)</sup>。このようにオスティアのヘルクレスは軍神としての性格が強く、予言を行う神でもあった。ところでローマで祀られたヘルクレスは、アッカ・ラレンティアの伝説でも予言を行う神として現れる。G. Wissowa はこの伝説を、宗教とは何の関係もない「野卑なお伽噺」として斥けたが<sup>(38)</sup>、予言する神ヘルクレスは、（不確かな）利得をもたらすとされるヘルクレスの霊験から生まれた可能性がある。戦争における勝利も、ある意味で「（不確かな）利得」と見なすことができるだろう。ローマではティベリス川の港に近いフォルム・ボアーリウムとポルタ・トリゲミナの近くに不敗の神ヘルクレス（ヘルクレス・インウィクトゥス）を祀る神殿があったが、オスティアでもヘルクレスは「（不確か



な) 利得」をもたらす神として、商人や船乗りによっても信仰されていた可能性がある。

「四小神殿の神域」に名前を与えた四棟の神殿は、一つのポディウムの上に、左右に分かれて二棟ずつ配置されている。四棟の神殿が単に並んで建てられているだけなら、ローマのラルゴ・アルジェンティーナの神域にも例があるが、こうしたオスティアの神殿の配置は特異と言えよう。左右に分かれた神殿群の間は、現在の遺構では奥（北側）に建物（ミトラエウム）が迫っていて通り抜けができないが、Rieger<sup>(39)</sup>によると、アウグストゥスの時代に境内の北側の壁が閉じられるまでは、北のティベリス川の側からもこの神域に入ることができた。ポディウムは南側と北側の両方に階段があったと考えられる。左右の神殿群の間の空間は、恐らくティベリス川の港からやって来た水夫や商人がオスティアの市街に入って住民と住民と接触するために通る敷居のような役割を果たしていた<sup>(39)</sup>。ローマでは、マテル・マトゥータとフォルトゥーナの二柱の女神を祀る「サント・オモボーノの神域」がオスティアの「四小神殿の神域」と構造上パラレルな関係にあり、ここもティベリス川の港から水夫や商人がカピトリーウムに入って住民と接触するために通る敷居のような意味を持っていたらしい<sup>(40)</sup>。予言を行う神としてオスティアとローマのヘルクレース祭儀に推測したパラレルな関係が、オスティアの四つの小神殿とローマのサント・オモボーノの神域でも認められるのは、オスティアの宗教を理解する上で極めて重要な点と言える。

#### 註

(1) しかし高さは、もともとの壁の高さではない。 cf. C. Pavolini, Ostia, in: *Dial. Arch.* 6-2 (1988) p. 119.

(2) cf. L. Richardson, jr., *A New Topographical Dictionary of Ancient Rome*, Baltimore / London 1992, p. 280.

(3) タブラリウムの下に立っていた神殿跡を現地で調査したが、このポディウムを確認することはできなかった。

(4) G. Calza, in *Scavi di Ostia I*, Roma 1953, p. 65. T. Frank, *Roman Buildings of the Republic*, Roma 1924, pp. 6 e 21 (non vidi) に従う。

(5) Calza 1953, pp. 76sq.

(6) F. Coarelli, I santuari, il fiume, gli empori, in *Storia di Roma I*, Torino 1988, pp. 137sq.

(7) A. Martin, Un saggio sulle mura del *castrum* (Reg. I, ins. x, 3), in: A. G. Zevi / A. Claridge

(ed.), *Roman Ostia' Revisited*, London 1996, pp. 35sq.

(8) R. Meiggs, *Roman Ostia*, 2nd ed., Oxford 1973, pp. 20-2.

(9) Meiggs 1973, p. 21. 破片の一つは前 5 世紀か、少なくとも前 4 世紀の初頭に遡りうる cf. B. Adembri, *Le ceramiche figurate più antiche di Ostia*, in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *Roman Ostia' Revisited*, London 1996, pp. 55sq.(numero 20) 数から言えば、前 4 世紀の前半か前 5 世紀にまで遡る絵付き陶器の破片は多くないが、 Zevi 1996, p. 79 は、この数少ない破片のなかで、” vasi aperti” (クラテール (希釈容器) や盃のように、上が開いた壺)、それもファレリイ産のクラテールやキュリクス (酒盃) が目立っていることを強調する。 Zeviによると、これら二つの陶器は、この時期の墳墓の副葬品として見つかったが、オスティアについて言えば、それらは祈願のために奉納されたらしく、前380~70 年頃に在地の祭儀、特にウルカーヌス神の祭儀が再び始まったと想像しうる。

(10) Martin 1996, p. 36.

(11) Martin 1996, pp. 35sq.

(12) F. Zevi, in *Ostia. port et porte de la Rome antique*, Genève 2001, p. 11; id., *Sulle fasi più antiche di Ostia*, in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *Roman Ostia' Revisited*, Roma 1996, p. 71.

(13) F. Zevi, *Appunti per una storia di Ostia repubblicana*, in: *MEFRA* 114 (2002) p. 51 (“sono riemerse ben conservate le poderose spallette in blocchi di tufo di accurata fattura, con ponticelli arcuati che consentono il sovrappasso di rivi”) e Fig. 8 e 9.

(14) Zevi, *loc. cit.*

(15) E. T. Salmon, *Roman Colonization under the Republic*, London / Southampton 1969, p. 71; p. 75.

(16) I. Pohl, *Was early Ostia a colony or a fort?* in: *PP* 38 (1983) pp. 123-30.

(17) Zevi 2002, p. 15.

(18) Salmon 1969, pp. 70-81. cf. Pavolini 1988, pp. 122f.; R. Mar, *La formazione dello spazio urbano nella città di Ostia*, in *MDAI(R)* 98 (1991) p. 81.

(19) R. Rebuffat, *Tite-Live et la forteresse d'Ostie*, in *Mélanges de philosophie, de littérature et d'histoire ancienne offerts à Moyancé*, Roma 1974, p. 631.

(20) Rebuffat 1974, p. 638 はカストルムの建設を、前 349 年のプラエトル L. Pinarius に帰している。かれの挙げる理由は以下のとおり：前 356 年に独裁官ガイウス・ルティリウスはテ

ティベリス川河口近くの塩田（salina）に侵攻してきたエトルリア人を迎え伐つため都市ローマから軍事行動を展開しているため、当時はまだカストルムは存在していなかった。しかし前48年にローマとカルターゴの間で結ばれた第2回条約に言及されている「ローマ人の港（複数）」（Polyb. III, 24, 6: *efiw toÁw Rvma€vn lim°naw*. cf. Liv. VII, 27, 2）は、ローマとオスティアの港以外にあり得ないので、当時オスティアはすでに存在していた（pp. 635sq.）。次いで、ピナーリウス氏がローマの大祭壇（*Ara Maxima*）のヘルクレス祭儀を司っており、ティベリス川の河川航行に従事していたと指摘し（pp. 641sq.）、まさに前349年のプラエトルがオスティアにカストルムを建設し、自然の船着場を補強して港に変えた人物にちがいないと結論づけている（p. 651）。しかし私には、この推論は根拠が乏しく、説得的でないように思える。

(21) G. Becatti, *La fondazione della città*, in: *Scavi di Ostia I*, Roma 1953, pp. 93sq.

(22) Mar 1991, p. 85.

(23) ここでは、ラウレントゥム／ラーウィーニウムの問題を論じる必要はない。いずれにせよ、たとえこの二つが別の都市だったとしても、ラウレントゥムは前4世紀の終わりには存在していなかった。

(24) F. Coarelli, in *Enea nel Lazio. Archeologia e mito*, Roma 1981, p. 161.

(25) R. R. Holloway, *The Archaeology of Early Rome and Latium*, London / New York 1994, pp. 129sq.; pp. 135-8; C. F. Giuliani, in *Enea nel Lazio*, p. 172; F. Castagnoli, in *Lavinium II Le tredici are*, Roma 1975, p. 4（前4世紀後半の改修のあと）。

(26) *Semita dei Cippi* は、カストルムの東側のポメリウム（都市を囲む神聖な線）に一致して走る *Via dei Mollini* を南に延長して作られた。cf. R. Meiggs, *Roman Ostia*, Oxford 1973<sup>2</sup>, p. 122.

(27) cf. Calza, *Scavi di Ostia*, Vol. I, p. 64.

(28) Zevi 2002, pp. 16sq.

(29) Zevi 2002, pp. 17sq.; Pavolini 1988, p. 121. ネクロポリの一つの墓で見つかった陶製容器は恐らくエトルリア南部で製造され、前340年よりも前のものと考え得る。Pavolini 1988, p. 121によると農場は、恐らくフィカーナと関係のあるアーケイック期の建物の跡に建てられた。

(30) Zevi 2002, p. 22.

(31) Pavolini 1988, p. 121.

(32) 特に A. J. Toynbee によって、その巨大な著書（*Hannibal's Legacy*, 2 vols. London

1965 ) の中で強調された。

(33) すでに H. Last が *CAH IX*<sup>1</sup>, p. 4. で指摘している。 cf. P. A. Brunt, *Italian Manpower. 225 B.C. - A.D. 14*, Oxford 1971, pp. 269sq. E. Gabba, in *CAH VIII*<sup>2</sup>, pp. 197sq. は、公有地の集積と私有地の拡大にとっての重要な要因として、第二回ポエニ戦争中に離反した国家に対してローマが行った懲罰のための遠征を挙げている。

(34) その他、ヘルクレス神殿の正面、境内の東側に帝政期の壁に囲まれて残る 4 基の祭壇も共和政期のもの。

(35) cf. G. Becatti, *BCACR* 67 (1939) pp. 37sq.; F. Zevi, in *Hellenismus in Mittelitalien*, 1. Teil, Göttingen 1976, pp. 54sq.; A. -K. Rieger, *Heiligtümer in Ostia*, München 2004, pp. 227sq.

(36) 中央のヘルクレスは箱から取り出した二つ折りの板を少年に手渡しているが、この板は箱の上にも開かれた状態で描かれ、そこには「ヘルクレスの予言 ( [s]ort(es) H(erculis) 」とかるうじて読める。

(37) ポルタ・マリーナ (海に向かって開く門) を出た先に、このカルティリウスのマウゾレウムが建っている。マウゾレウムのフリーズには軍船で攻め寄る敵に対して陸上で防戦する兵士たちが描かれているが、 Zevi 1976, pp. 56sq. はこのレリーフをヘルクレス神殿で奉納されたカルティリウスの像と結びつけて、彼は二人役だった時にセクストゥス・ポンペイウスの攻撃からオスティアの海岸を守りぬいたので、その記念として像をヘルクレス神に奉納したという非常に興味深い解釈を提示した。

(38) *RuKR* 2. Aufl. p. 283.

(39) Rieger 2004. S. 54~6 und Abb. 29. cf. D. Steuernagel, *Kult und Alltag in römischen Hafentädten. Soziale Prozesse in archäologischer Perspektive*, Stuttgart 2004, S. 66~7.

(40) Rieger 2004, S.81~83; Steuernagel 2004, S. 68.

Un rapporto sulle indagini storiche di Ostia antica eseguite 2008-2010

Akira Mori (professore emerito di Università di Kobe)

I. *castrum*

Per quanto riguarda la cinta del *castrum* ho ispezionato sul luogo la parte a nord della porta orientale che rimane ancor oggi nella forma originale, perché era incorporata in edifici dell'età imperiale(1). Si tratta dei *opera quadrata* del tufo proveniente dalle cave del Castel Giubileo presso Fidenae, che, come si ritiene generalmente, erano disponibili ai Romani solo dopo la conquista di Veii al inizio del IV sec. a. C. Dallo stesso materiale furono costruiti secondo G. Calza solo la seconda cinta del Palatino (379 a.C.)(2) e il podium del primo tempio della Concordia (366 a.C.)(3). Essendo di meno qualità il tufo non era usato più dai Romani oltre a questi tre monumenti(4). Questa osservazione e altre considerazioni sui dati topografici e sui dati ottenuti dai fittili hanno indotto il Calza a credere che il *castrum* di Ostia sia stato costruito alla fine del IV oppure al inizio del III sec. a.C.(5) Ma proprio alla base del materiale della cinta del *castrum* F. Coarelli vuole proporre una datazione più alta(6). Secondo lui i Romani hanno rinunciato a utilizzare il tufo di Fidenae del tutto dopo che le cave di Grotta Oscura erano state aperte per loro. Questo è successo dopo la conquista di Veii e il nuovo materiale è utilizzato per la "ricostruzione" delle mura serviane (a partire dal 377 a.C., sempre secondo Coarelli). Inoltre Coarelli suppone un movente ideologico di utilizzare il materiale proveniente dal territorio della città vinta da se e quindi conclude che la costruzione della cinta del *castrum* può risalire al tempo dopo la presa e la distruzione di Fidenae da parte dei Romani (435 o 426 a.C.). La datazione del *castrum* alla base del materiale della cinta oscilla così nel arco di più che 100 anni e inoltre la priorità di Grotta Oscura rispetto al tufo di Fidenae non è in realtà provata(7). Dunque penso che si debba consentire con A. Martin nel respingere l'uso del tufo di Fidenae per la datazione del *castrum*.

Considerando il sfondo storico e basando su frammenti di ceramiche scavati nel Foro imperiale che era una volta il centro del *castrum* R. Meiggs pone la costruzione del *castrum* alla oppure prima della metà del IV sec. a.C. (8) La riva del mare dell'Italia centrale sembra essere spesso stata saccheggiata dai Greci già dal inizio di IV secolo. Secondo Diodoros Pyrgi fu saccheggiata nel 384/3 a.C. dalla flotta di Dionysios I, tiranno di Syracusae (XV, 13-4). Poi Livius scrive che nel anno 349 a.C. proprio la riva del Latium dalla *ostia Tiberis* alla *ora litoris Antiatis* e il mare davanti a questa zona erano minacciati

da pirati greci (VII, 25, 4). Il *praetor* L. Pinarius fu inviato alla riva per difenderla, e anche se non avesse avuto luogo un combattimento degno di raccontare i Greci se ne andarono per mancanza dell'acqua e altri oggetti indispensabili. Il Meiggs vuole mettere questa informazione in relazione diretta colla costruzione del *castrum*. Naturalmente è probabile che la situazione storica che Livius racconta abbia avvertito i Romani della necessità di migliorare il sistema difensivo nella zona marina, ma è dubbio che loro abbiano costruito il *castrum* per affrontare un pericolo concreto come quello del anno 349 a.C. perché il *castrum* (c. 2.5 ha) sembra troppo grande per questo scopo. Quanto ai frammenti di vasi importati e databili tra 400 e 340 che furono scavati dal Foro imperiale(9), questi non sono determinanti per la datazione del *castrum*, come il Martin sottolinea(10), perché la possibilità non è da escludere che il sito sia stato frequentato o addirittura ci siano stati insediamenti lì prima della costruzione del *castrum*. Inoltre il Martin fa notare che le indagini finora eseguite partono da una premessa non provata che la cinta del *castrum* sia stata costruita di un sol colpo. Il Martin stesso afferma sulla base di suo saggio nell'area di una *taberna* della Reg. I, ins. x. 3 (cioè sulla base di frammenti di coppe scavati dallo strato della costruzione della cinta) che almeno in questo luogo il *castrum* non può risalire oltre la fine del IV sec. a.C.(11)

Il Martin non ha escluso la possibilità che il *castrum* fosse stato costruito nel III sec. a. C., ma F. Zevi, nonostante che valutasse molto il saggio eseguito dal Martin, non vuole ammettere la possibilità di una così tarda datazione e sostiene la fine del IV sec. a.C. per la fondazione del *castrum*. Il più interessante argomento sarebbe quello sul rapporto organico e inseparabile che esisteva tra il *castrum* e la Via Ostiense. Secondo lo Zevi questo rapporto ci forza a supporre che la via e il *castrum* furono costruiti nello stesso tempo e perché la via ha tutto l'aspetto di un "asse viario militare" e somiglia molto, per quanto riguarda la tecnica, la Via Appia (312 a. C.) e forse anche la Via Latina, sarebbe da trarre da questa osservazione la conclusione che anche il *castrum* era costruito in quel tempo, cioè alla fine del IV sec. a.C.(12) Alcuni tratti della Via Ostiense sono stati scavati nel territorio ostiense da Dott. A. Pellegrino (Soprintendenza di Ostia). Uno dei più importanti sarebbe quello scavato all'altezza della borgata Acilia, dove "sono riemerse ben conservate le poderose

spallette in blocchi di tufo di accurata fattura, con ponticelli arcuati che consentono il sovrappasso di rivi”(13). Pellegrino l’ha fatto risalire fino al III sec. Zevi aveva pensato prima ad una datazione graccana, ma ha cambiato dopo la sua opinione e consente alla datazione proposta dal scavatore(14). Dott. M. Raddi che ha toccato anche questi scavi nella conferenza tenuta alla Università di Kobe (18. 11. 2010) e nella sua relazione al Kyoto Simposio (21.11.2010) collega la costruzione del viadotto da parte di Roma con “la necessità di un collegamento sicuro e veloce con il porto ostiense in occasione delle guerre puniche.” Questo scavo forse dimostra esplicitamente come la Via Ostiense è stata rifatta e migliorata secondo le necessità militari e annonarie dopo essere stata aperta.

E. T. Salmon che ha eseguito una ricerca comprensiva sulla colonizzazione romana nell’età repubblicana sostiene che le colonizzazioni a Ostia e ad Antium siano state i primi esempi delle *coloniae maritimae*, e le colloca nel tempo dopo la Guerra Latina (341~338 a.C.), quando Roma fissava la relazione tra se e ciascuno stato vinto(15). Roma ha spedito una simile colonizzazione a Tarracina in 329 a.C., poi a Minturnae e Sinuessa in 296 a.C. Tra Roma e Tarracina fu aperto un “asse viario militare”(Via Appia) 17 anni dopo la colonizzazione (312 a.C.). Anche a Ostia sarà possibile che la costruzione della “asse viario militare” (Via Ostiense) si sia stata realizzata dopo la costruzione del *castrum*.

Alla datazione del impianto del *castrum* verso la fine del IV sec. a.C. si oppone spesso il fatto che Livius non dice niente sulla colonizzazione a Ostia nella seconda pentade della sua storia. Questo fatto con altri argomenti (fino almeno alla fine del II sec. a.C. Ostia era governato direttamente dai *praetores urbani* di Roma; mancava del *forum* nel *castrum* repubblicano; non sono trovate tombe medio-reppublicane che appartenevano al *castrum*) ha indotto I. Pohl a credere che prima della costruzione delle c.d. mura sillane Ostia non era una colonia (a colony) ma solo una fortezza militare (a fort)(16). Ma come lo Zevi giustamente indica, la contrapposizione tra ‘fort’ e ‘colony’ non sarebbe appropriata(17). Il *castrum* fu concepito come una *colonia maritima* il cui carattere militare non è disputabile(18). Per quanto riguarda il silenzio liviano R. Rebuffat sostiene che l’impianto da Ancus Marcius era così consolidato nella tradizione annalistica che non c’era spazio più

per un nuovo impianto(19). Forse non dobbiamo dimenticare in questo rapporto anche il fatto che i *fasti* del IV sec. a.C. hanno lacune e sono soggetti a confusioni. Si tratta non solo dei nomi di magistri eponimi, ma anche delle informazioni storiche che sono state trasmesse forse con i nomi di magistri. Ma io penso che sia forse un'altra causa, perché Livius tace l'impianto del 4 secolo a. C. Livius scrive sulla colonizzazione a Antium nel contesto in cui narra dei provvedimenti applicati da Roma contro i vinti. Se il *castrum* fu costruito nel territorio romano, non sarebbe apposto menzionarlo qui, e giacché ha detto della colonizzazione a Antium, non ci sarebbe più uno spazio per fare menzione del *castrum* che fu costruito nello stesso tempo che la colonizzazione a Antium(20).

È G. Becatti che ha intuito il rapporto tra la collocazione del *castrum* e la viabilità(21). Secondo lui l'orientamento del *castrum* era determinato da un camminamento preesistente (la futura Via Ostiense) che aveva collegato Roma con le saline e con il mare, cioè il tracciato ultimo di questa via antica venne a creare il *decumanus maximus* del *castrum*. Il Becatti indica inoltre che il tratto meridionale del *cardo maximus* della città sillana e imperiale e la Via della Foce della città del stesso periodo si ricongiungono formando un unico tracciato antico che, preesistente al *castrum*, andava dalla pianura laurentina verso l'imboccatura del Tevere (la Via Laurentina). R. Mar pensa che l'antica Via Ostiense sia stata un prolungamento della Via Salaria proveniente dalla Sabina e perciò consente con il Becatti nel assumere che sia stata anteriore alla costruzione del *castrum*. Ma per quanto riguarda il rapporto cronologico fra la Via Laurentina e la fondazione del *castrum* non è così sicuro d'antiorità della via rispetto allo stabilimento militare(22).

Prima consento io con il Becatti e il Mar nel supporre l'esistenza di una via antica che collegava Roma con le saline che per inciso devono essere state a est del luogo dove dopo sarebbe stato costruito il *castrum*. È possibile che questa via abbia condotto fino alla riva e dopo abbia creato il *decumanus maximus* del *castrum*. Ma suppongo che il tracciato di questa via che non era stata aperta premeditatamente non sia totalmente identica con quello della Via Ostiense che, come lo Zevi fece notare, fu concepita come un "asse viario militare." Dunque se era la antica via "salaria" che creò il *decumanus maximus* del



*castrum*, la mia ipotesi sopra esposta della posteriorità della Via Ostiense rispetto al *castrum* otterrà di più la probabilità. Per quanto riguarda il rapporto cronologico fra la Via Laurentina e la fondazione del *castrum*, l'argomentazione del Mar non mi sembra convincente e vorrei supporre che una via portante dal *ager Laurens* alla foce del Tevere sia già esistita prima del *castrum* accettando l'ipotesi del Becatti su Via della Foce e Via Laurentina.

Se il *castrum* fu costruito tagliando una parte della antica Via Laurentina, la costruzione non potrebbe essere stata senza importanza per Lavinium(23). Livius scrive di Lavinium durante la Guerra Latina: “*Latinis quoque ab Lauinio auxilium, dum deliberando terunt tempus, uictis demum ferri coeptum; et, cum iam portis prima signa et pars agminis esset egressa, nuntio allato de clade Latinorum cum conuersis signis retro in urbem rediretur*” (VIII, 11, 3f. cf. *CIL* X, 797) e aggiunge dopo la guerra che il senato ordinò di rinnovare il trattato con i *Laurentes* che dopo di ciò si rinnova ogni anno al decimo giorno dopo la *feriae Latinae* (VIII, 11, 15). Da queste tradizioni annalistiche è difficile supporre il rapporto reale che esisteva veramente tra Roma e Lavinium. Dall'altro canto secondo Macrobius (*Sat.* III, 4, 11f.) *consules* e *praetores* si recavano a Lavinium per sacrificare ai *Penates* e *Vesta* subito dopo di avere assunto la loro carica. Coarelli pensa che dopo la vittoria sui Latini, i Romani abbiano voluto ricostituire, con un vincolo sacro, l'unità dei Latini sotto la sua supremazia(24). Infatti gli ultimi interventi su vasta scala nel santuario delle tredici are di Lavinium sono datati alla fine del IV sec. a. C. (25), cioè quasi allo stesso tempo colla costruzione del *castrum*, un fatto che non potrebbe essere un puro caso. Dopo la guerra latina Roma ha incorporato anche Lavinium in effetto nel suo sistema del dominio in Latium e Campania settentrionale. A questo proposito il taglio della antica Via Laurentina per costruire il *castrum* può essere stimato sotto doppio aspetto, cioè sotto l'aspetto del dominio e sotto l'aspetto del patronato. Il *castrum* poteva impedire pirati e rapinatori che sbarcavano alla foce di invadere il territorio di Lavinium, ma questo vuole anche dire che i *laurentes* hanno perso il contatto diretto con la foce. Però la Semita dei Cippi dietro il *castrum*(veduto dal mare)(26) ha collegato la nuova Via Laurentina con la Via Ostiense e poi coi approdi della riva sinistra del Tevere. Comunque per capire il rapporto tra Roma e

Lavinium in quel tempo sarebbe anche necessario tenere in considerazione Via Laurentina come la costruzione del *castrum*.

Per quanto riguarda la relazione tra Roma e Lavinium rimane ancora un problema che ci interessa. Sopra ho detto che se il *castrum* fu fondato nel territorio romano al tempo della colonizzazione a Antium il silenzio di Livius è esplicabile. Ma se l'ager laurens si fosse esteso fino alla foce del Tevere al tempo della Guerra Latina(27), sarebbe possibile che Roma abbia costruito il *castrum* nel luogo rapito. Ma io credo che questa possibilità non sia molto probabile. Dopo che aveva distrutto Veii Roma poteva verosimilmente esercitare il dominio nella zona intorno alla foce del Tevere, anche se ci potevano essere ogni tanto conflitti forse anche con Lavinium così come con Caere. Ma nella storiografia repubblicana possibili conflitti tra Roma e Lavinium sono stati respinti per una ragione o per un'altra, e in ogni caso Livius deve essere stato convinto della proprietà di questa zona da parte dei Romani dopo la conquista da Ancus Marcius. Probabilmente Roma ha costruito il *castrum* non perché affrontasse una concreta minaccia, ma l'ha fatto come una parte del sistema difensivo che stava costruendo nel Latium e nella Campania settentrionale dopo la Guerra latina. È possibile che l'esperienza in 349 faceva i Romani accorgersi della necessità di un sistema difensivo più efficiente sulla costa del Latium dalla foce del Tiberis a Antium. Ma anche in questo caso non sarebbe necessario pensare che Roma si abbia messo all'opera subito. Piuttosto solo dopo che hanno distrutto le forze navali di Antium hanno forse cominciato a costruire il sistema difensivo da se e di sua iniziativa.

## II. ager Ostiensis: Nuovi indagini archeologici

Il Pellegrino ha indicato nella conferenza di Università di Kobe e al Kyoto Simposio del anno 2010 che la terra tra Roma e Ostia era stata una volta niente come un deserto, ma saggi di scavo condotti nel territorio di Ostia da decenni anni hanno portato alla luce molti avanzi importanti e interessanti. I saggi furono eseguiti sulle alture tra il Tevere e la Via Ostiense (Dragoncello, Mondì di S. Paolo, Monte Cugno) e in un'area di Malafede, e hanno scavato ville e necropoli dell'età medio-repubblicana(28). A Dragoncello alcune fattorie (sono databili al tardo IV o anche al III sec. a. C. e alcune di esse avevano vicino piccole

necropoli) sono state scavate per opera di Pellegrino(29). Secondo le indagini dello scavatore le ville medio-repubblicane duravano fino verso la fine del II oppure al inizio del I sec. a. C., furono poi abbandonate, ma già in età sillano-cesariana alcune hanno cominciato a essere ricostruite e altre sono state rinnovate in età imperiale(30). Questi risultati furono riferiti anche da Raddi nella conferenza di Università di Kobe e al Kyoto Simposio. Valutarli storicamente è un tentativo molto interessante, ma meno facile. Per quanto riguarda le fattorie medio-repubblicane scavate a Dragoncello, vorrei solo ripetere l'intervento di Pavolino sulla attuale situazione di ricerca che dai dati finora ottenuti non è possibile supporre qualcosa sugli eventuali rapporti istituzionali fra i contadini di Dragoncello e l'insediamento medio-repubblicano di Ostia(31).

Per storici sono soprattutto importanti le cause dell' abbandono delle fattorie medio-repubblicane nel tardo II o primo I sec. a.C. così come della loro parziale ricostruzione in età sillano-cesariana. Qui non si potrebbe pensare degli effetti diretti della seconda guerra punica considerato solo il fatto che l'abbandono è successo ca. un secolo dopo la fine della guerra. Inoltre i distruttivi effetti della guerra sulla agricoltura d'Italia sottolineati una volta(32) erano in realtà forse piuttosto indiretti e anche limitati(33). Ora i saggi di scavo a Dragoncello dimostrano che in periferia di Roma piccole imprese agricole duravano lungamente dopo la seconda guerra punica. Sarebbe difficile nominare le cause speciali dell'abbandono, se era successo alla fine del II sec. a. C. Invece se è successo al inizio del I sec. a. C. la possibilità di essere causato dalla guerra civile tra i Sillani e i Mariani non sarebbe da escludere.

### III. Religioni tradizionali di Ostia e Roma

Un altro soggetto delle mie indagini a Ostia è la vita religiosa degli abitanti nell'età repubblicana. Il punto di partenza era per me una domanda che cosa significava la religione tradizionale per quelli che abitavano a una *colonia romana* come Ostia. Per questo scopo ho esaminato col gentile aiuto delle dott.ssa P. Germoni e dott.ssa P. Olivanti alcuni votivi scavati nei santuari ostiensi, ma non ho potuto ottenere risultati soddisfanti, perché i rapporti storici dei votivi scavati non sempre erano chiari e i votivi non mi sembravano

esprimere i sentimenti particolari di quelli che li avevano offerti come ex voto anatomici, salvo qualche eccezione come figurine di terracotta portanti un sacco sulle spalle (votivi di lavoratori lavoranti al poroto o alle salinae?). Ho visitato anche i musei archeologici di Anzio e Terracina, perché a queste città dei *Volsci* i Romani hanno impiantato *coloniae romanae* quasi nello stesso tempo come a Ostia. A Terracina non c'era quasi niente che avevo cercato, invece a Anzio m'interessavano alcune figurine di terracotta. Erano scavate dal deposito votivo di Viale delle Roselle (cioè forse appartenente alla *colonia romana*) e sembravano essere votivi tipici di santuarii di Latium. Ma anche a Anzio queste erano tutte che sembravano essere utili al mio studio.

Di santuarii di Ostia che risalgono all'età repubblicana potevo occuparmi solo di due: la c.d. *area sacra repubblicana* e il *santuario dei quattro tempietti*.

La *area sacra repubblicana* era usata con molti interventi e ricostruzioni fino alla fine dell'età romana e il tempio di Ercole, il tempio delle divinità salutari, il tempio dell'Ara Rotonda (non è conosciuto a chi era dedicato) e quattro are risalgono all'età repubblicana(34). A e vicino al tempio di Ercole erano scavati alcuni oggetti importanti. In primo luogo una ara trovata nel pronao del tempio. L'iscrizione dice che era dedicata da Hostilius Antipater praefectus annonae a *Invictus Hercules* e così sappiamo a chi il tempio era dedicato(35). Il secondo oggetto è una tavola di marmo con rilievo trovata nell'area antistante del tempio di Ercole. Si tratta di un votivo dedicato da C. Fulvius Salvis haruspex e il rilievo è generalmente interpretato come rappresentante una predizione di Ercole(36). Sulla sinistra del rilievo vola in senso sinistro una piccola Vittoria portante una corona d'alloro. Sembra consegnarla a qualcuno, ma il bordo sinistro della tavola è distrutto e manca la persona che potrebbe essere stata scavata forse lì. Probabilmente la predizione fatta da Ercole nella scena centrale concerne la vittoria che questa persona otterrà. Secondo Becatti questo rilievo è un prodotto locale fatto tra 80 e 65 a. C. Vicino al tempio di Ercole fu trovato ancora una acefala statua maschile dedicata secondo la iscrizione da C. Cartilius Poplicola tra suo secondo e terzo duovirato (40 ~ 30 a. C.). È considerata come l'immagine del dedicatore eroicizzato(37). L'Ercole a Ostia è così spicco per caratteri

militari come per un dio predicente. Dunque Ercole appare anche nella leggenda di Acca Larentia come un dio predicente, e benché G. Wissowa abbia respinto questa leggenda come “ein burleskes Märchen, das mit der Religion nichts zu tun habe”(38), sarà possibile, che l'immagine di Hercules come il dio predicente sia nata dalla sua funzione del dio portante (incerti) profitti, e anche la vittoria potrebbe essere considerato come un (incerto) profitto. Come a Roma c'erano due templi di Hercules Invictus vicino al porto di Tevere, l'uno al *forum Boarium* e l'altro accanto alla *porta Trigemina*, così è possibile che anche a Ostia Hercules sia adorato come un dio portante (incerti) profitti anche da mercanti e marinai.

I templi che hanno dato il santuario il suo nome *Quattro tempietti* sono disposti su un podium così come i due sono uniti alla destra e gli altri due alla sinistra. Questa disposizione sembra straordinaria benché non manchino esempi per templi solo affiancati, come l'*Area Sacra del Largo Argentina* a Roma. Tra due gruppi dei templi c'è uno spazio che non si può trascorrere oggi perché dietro il podium (sul lato settentrionale del santuario) si restringe un gruppo di edifici. Ma secondo Rieger(39) si aveva potuto entrare nel santuario anche dal lato di Tevere finché il recinto settentrionale del santuario non fu chiuso nel tempo Augusteo e così lo spazio tra due gruppi degli templi avrebbe potuto servire a la soglia per mercanti e marinai che venivano dal porto di Tevere per entrare la città Ostia e mettersi in contatto coi cittadini. A Roma lo spazio tra i templi di Mater Matuta e di Fortuna del santuario di S. Omobono sembra avere avuto una simile funzione per mercanti e marinai che venivano dal porto di Tevere per entrare il Capitolium e mettersi in contatto coi cittadini di Roma (40). Dunque tra il santuario del Quattro Tempietti di Ostia e quello del santuario di S. Omobono si può scorgere un simile parallelismo come quello supponibile tra Ostia e Roma intorno al culto di Ercole come dio predicente e portante (incerti) profitti. Credo che sia molto importante rivolgere l'attenzione a questo parallelismo per comprendere Religioni tradizionali di Ostia.

#### Note

(1) Ma L'altezza non è originaria. cf. C. Pavolini, Ostia, in: *Dial. Arch.* 6-2 (1988) p. 119.

(2) cf. L. Richardson, jr., *A New Topographical Dictionary of Ancient Rome*, Baltimore /

London 1992, p. 280.

(3) Non sono riuscito a identificare sul luogo questo podium del tempio sotto il Tabularium a Roma.

(4) G. Calza, in *Scavi di Ostia I*, Roma 1953, p. 65, secondo T. Frank, *Roman Buildings of the Republic*, Roma 1924, pp. 6 e 21 (non vidi).

(5) Calza 1953, pp. 76sq.

(6) F. Coarelli, I santuari, il fiume, gli empori, in *Storia di Roma I*, Torino 1988, pp. 137sq.

(7) A. Martin, Un saggio sulle mura del *castrum* (Reg. I, ins. x, 3), in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *'Roman Ostia' Revisited*, London 1996, pp. 35sq.

(8) R. Meiggs, *Roman Ostia*, 2nd ed., Oxford 1973, pp. 20-2.

(9) Meiggs 1973, p. 21. Un frammento potrebbe risalire al V oppure almeno al inizio del IV sec. a. C. cf. B. Adembri, Le ceramiche figurate più antiche di Ostia, in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *'Roman Ostia' Revisited*, London 1996, pp. 55sq.(numero 20) Quantitativamente non sono molti i frammenti di ceramica dipinta che risalgono alla prima metà del IV o al V sec. a.C., ma Zevi 1996, p. 79 sottolinea che in questo piccolo numero risaltano vasi aperti (crateri, patere, coppe), soprattutto i crateri e le *kylikes* falische. Secondo lui, questi due tipi di vasi sono quelli trovati in questo periodo in corredi tombali, ma nel contesto ostiense devono avere il valore di una offerta votiva e quindi si può supporre che gli anni attorno al 380-370 siano stati ripresi culti locali, in primo luogo quello di Vulcano.

(10) Martin 1996, p. 36.

(11) Martin 1996, pp. 35sq.

(12) F. Zevi, in *Ostia. port et porte de la Rome antique*, Genève 2001, p. 11; id., Sulle fasi più antiche di Ostia, in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *'Roman Ostia' Revisited*, Roma 1996, p. 71.

(13) F. Zevi, Appunti per una storia di Ostia repubblicana, in: *MEFRA* 114 (2002) p. 51 e Fig. 8 e 9.

(14) Zevi, *loc. cit.*

(15) E. T. Salmon, *Roman Colonization under the Republic*, London / Southampton 1969, p. 71; p. 75.

(16) I. Pohl, Was early Ostia a colony or a fort? in: *PP* 38 (1983) pp. 123-30.

(17) Zevi 2002, p. 15.

(18) Salmon 1969, pp. 70-81. cf. Pavolini 1988, pp. 122f.; R. Mar, La formazione dello spazio urbano nella città di Ostia, in *MDAI(R)* 98 (1991) p. 81.

(19) R. Rebuffat, Tite-Live et la forteresse d'Ostie, in *Mélanges de philosophie, de littérature et d'histoire ancienne offerts à Moyancé*, Roma 1974, p. 631.

(20) Rebuffat 1974, p. 638 attribuisce la costruzione del *castrum* a L. Pinarius, *praetor* del anno 349 a. C. I suoi ragionamenti si sviluppano così: il *castrum* non era ancora esistito in 356 a.C., perché il *dictator* C. Marcius Rutilius operava dalla *urbs* contro gli Etruschi che avevano invaso le saline, ma già esisteva in 348 a. C., perché i porti che il secondo trattato tra Roma e Cartagine menziona (Polyb. III, 24, 6: *efiw toÁw Rvma€vn lim°naw*. cf. Liv. VII, 27, 2) non possono essere altri che i porti di Roma e di *Ostia* (pp. 635sq.). Poi indicando che la *gens Pinaria* assumeva il culto d'Ercole della *Ara Maxima* a Roma e era impegnata nella navigazione fluviale del Tevere (pp. 641sq.), conclude che il *praetor* del 349 deve essere proprio quello che ha costruito il *castrum* a Ostia, e avendo munito un approdo naturale l'ha trasformato in un porto (p. 651). Argomentazioni come queste mi sembrano deboli e non molto convincenti.

(21) G. Becatti, La fondazione della città, in: *Scavi di Ostia I*, Roma 1953, pp. 93sq.

(22) Mar 1991, p. 85.

(23) Qui non è necessario discutere il problema di Laurentum/Lavinium. Comunque Laurentum non esisteva alla fine del IV sec. a. C., anche se due fossero state città distinte.

(24) F. Coarelli, in *Enea nel Lazio. Archeologia e mito*, Roma 1981, p. 161.

(25) R. R. Holloway, *The Archaeology of Early Rome and Latium*, London / New York 1994, pp. 129sq.; pp. 135-8; C. F. Giuliani, in *Enea nel Lazio*, p. 172; F. Castagnoli, in *Lavinium II Le tredici are*, Roma 1975, p. 4 (dopo l'intervento della seconda metà del IV sec.).

(26) La Semita dei Cippi fu costruita stendendo verso il sud la Via dei Mollini che era coincidente col *pomerium* esterno orientale. cf. R. Meiggs, *Roman Ostia*, Oxford 1973<sup>2</sup>, p. 122.

(27) cf. Calza, *Scavi di Ostia*, Vol. I, p. 64.

(28) Zevi 2002, pp. 16sq.

(29) Zevi 2002, pp. 17sq.; Pavolini 1988, p. 121. Un vaso scavato da una tomba delle necropoli fu prodotto forse nella Etruria meridionale e può datarsi al tempo prima di 340 a. C. Secondo Pavolini 1988, p. 121 le fattorie erano precedute da edifici arcaici forse legati a Ficana.

(30) Zevi 2002, p. 22.

(31) Pavolini 1988, p. 121.

(32) soprattutto da A. J. Toynbee nel suo libro gigantesco: *Hannibal's Legacy*, 2 vols. London 1965.

(33) già da H. Last, in *CAH IX*<sup>1</sup>, p. 4. cf. P. A. Brunt, *Italian Manpower. 225 B.C. - A.D. 14*, Oxford 1971, pp. 269sq. E. Gabba, in *CAH VIII*<sup>2</sup>, pp. 197sq. vuole attribuire per la accumulazione del *ager publicus* e l'estensione della proprietà privata maggiore importanza alle spedizioni punitive fatte da Roma contro quelli che avevano defezionato durante la guerra.

(34) Oltre di loro risalgono all'età repubblicana anche quattro are che rimangono recintati dal recinto dell'età imperiale di fronte al tempio di Ercole.

(35) cf. G. Becatti, *BCACR* 67 (1939) pp. 37sq.; F. Zevi, in *Hellenismus in Mittelitalien*, 1. Teil, Göttingen 1976, pp. 54sq.; A. -K. Rieger, *Heiligtümer in Ostia*, München 2004, pp. 227sq.

(36) Il Ercole nel centro consegna una tavola piegata a un ragazzo. La tavola sembra essere stata nella cassetta dietro e al sopra della cassetta è ancora rappresentata la tavola, aperta questa volta, sopra cui si può appena leggere “[s]ort(es) H(erculis)”.

(37) Fuori della Porta Marina c'è il mausoleo sepolcrale di questo Cartilius il cui facciata è coronata da un fregio rappresentante soldati che sulla terra difendono dagli attacchi di una nave da guerra. Zevi 1976, pp. 56sq. ha messo questo rilievo in relazione con la statua iconica collocata nel santuario di Ercole e ha dato una geniale interpretazione che Cartilius avesse difeso da duovir la spiaggia di Ostia contro l'assalto di Sex. Pompeius e per commemorare la vittoria avesse dedicato la statua.

(38) *RuKR* 2. Aufl. p. 283.

(39) Rieger 2004, pp. 54~6. cf. D. Steuernagel, *Kult und Alltag in römischen Hafenstädten. Soziale Prozesse in archäologischer Perspektive*, Stuttgart 2004, pp. 66~7.



(40) Rieger 2004, pp.81~83; Steuernagel 2004, p. 68.

Bibliografia:

- B. Adembri, Le ceramiche figurate più antiche di Ostia, in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *'Roman Ostia' Revisited*, London 1996
- G. S. Aldrete, *Daily Life in the Roman City*, Norman 2008 (= 2004)
- G. Calza, Le mura sillane, in: G. Calza et al. (a cura di), *Scavi di Ostia*, I, Roma 1953
- F. Coarelli, I santuari, il fiume, gli empori, in: *Storia di Roma I*, Torino 1988
- A. Martin, Un saggio sulle mura del *castrum* (Reg. I, ins. x, 3), in: A. G. Zevi / A. Claridge (ed.), *'Roman Ostia' Revisited*, London 1996
- R. Meiggs, *Roman Ostia*, 2nd ed., Oxford 1973
- S. P. Oakley, *A Commentary on Livy*, II, Oxford 1998
- C. Pavolini, Ostia, in: *Dialoghi di Archeologia* 6-2 (1988)
- I. Pohl, Was early Ostia a colony or a fort? in: *Parola del Passato*, 38 (1983)
- R. Rebuffat, Tite-Live et la forteresse d'Ostie, in: *Mélanges de philosophie, de littérature et d'histoire ancienne offerts à Pierre Boyancé*, Rome 1974
- L. Richardson, jr., *A New Topographical Dictionary of Ancient Rome*, Baltimore / London 1992
- A.-K. Rieger, Les sanctuaires publics à Ostie de la République jusqu'au Haut Empire, in: J.-P. Descœudres (sous la direction de), *Ostia. port et porte de la Rome antique*, Genève 2001
- A.-K. Rieger, *Heiligtümer in Ostia*, München 2004
- E. T. Salmon, *Roman Colonization under the Republic*, London / Southampton 1969
- D. Steuernagel, *Kult und Alltag in römischen Hafenstädten*, Stuttgart 2004
- E. D. Westlake, Dion and Timoleon, in: *CAH VI*, 2nd ed., Cambridge 1992
- F. Zevi, Ostie sous la République, in: J.-P. Descœudres, *Ostia, port et porte de la Rome antique*, Genève 2001
- F. Zevi, Appunti per una storia di Ostia repubblicana, in: *Mélanges de l'École Française de Rome (Antiquité)* 114 (2002)